

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(27) : アフリカ便り2 : ナイロビにて

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	300
ページ	58-60
発行年	2006-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5195

縦横無尽 タテとヨコ 色とカタチ のファイールドワーク

吉本 忍

アフリカ便り② ナイロビにて



写真1 テーラーでの縫製1 (セネガル、ダカール：2005年)



写真2 テーラーでの縫製2 (ガーナ、アクラ：2005年)

パリ経由でセネガルのダカール入りして、アフリカ大陸を西から東に移動する旅は、わたしにとって5年ぶり、2度目のことである。アフリカでの移動は飛行機のフライトスケジュールがしばしば変更を余儀なくされることから、今回のように40日という短期間のうちに予定通り10カ国を飛び回るということは至難のわざである。しかし、前回と同様に、今回も一部で経路を変更しながらも、ほぼ予定通りにアフリカン・プリントの調査、収集、撮影などを無事に終え、今は最終調査地のマダガスカルからケニアのナイロビにたどり着いて、日本への帰国便を待っているところである。



写真3 中国・上海の文字が印刷されたラベル (ナイジェリア、ラゴス：2005年)



写真4 AS VILISCOと記されたラベル (カメルーン、ドゥアラ：2005年)



写真5 GCMとそれを模したGCNのラベル (ナイジェリア、ラゴス：2005年)



写真6 GCMを模したBNOのラベル (ナイジェリア、ラゴス：2005年)

中国プリント産業の進出
民博(国立民族学博物館)で予定している今回の特別展は、これまで仮のタイトルを「テキスタイル・グローバルゼーション」としてきたが、最終的には「更紗今昔物語—ジャワから世界へ—」とすることで落ち着きそうな気配である。この展覧会では、インドネシアを代表するテキスタイルとして知られていたジャワ更紗のデザインとロウケツ染めの技術が、19世紀以降、今日に至るまでのほぼ200年のあいだにひろく海外に波及し、それぞれの地域で独自の展開を見せていることの実態を紹介することをおもな目的としている。そうした特別展においても中心となる展示は、近・現代の熱帯アフリカのファッショ素材となってきたアフリカン・プリントである。それらについては、民博ではすでにアフリカ各地の市場などで売られていた未縫製の布を数多く収集している。ただし、今回の展覧会ではそれらとともに、縫製された衣装の展示もおこなうことから、今回のわたしのアフリカでのおもな仕事は、あらたにアフリカン・プリントを布素材とした衣装を収集することであった。したがって、セネガルのダカールから始まったアフリカ各国歴訪の旅

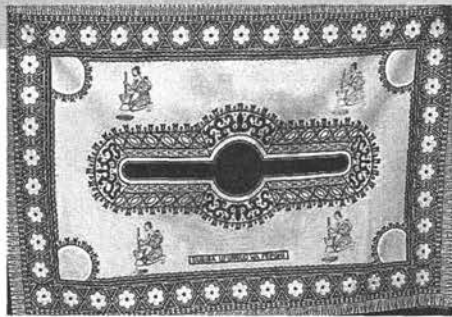


写真9 日本から丸紅が輸出したと見られるカンガ（ポーターに「KHANGA YA MARUBEN」の名称がプリントされている。ザンジバル国立博物館蔵／ザンジバル・2005年）



写真7 カンガを売る店（ケニア、モンバサ・2005年）



写真8 カンガをまとった女性たち（ザンジバル：2005年）

では、いずれの国でも3〜4日という短期間の滞在中に、市場でアフリカン・プリントを選び、その一部をテラーに持ち込んで縫製させたのち、それらを民博に航空便で発送するということを繰り返してきた。また、その一方では、市場や街中、さらには現地で生産されているアフリカン・プリントの工場などで調査や撮影もこなしてきた。

そうしたアフリカ各国での旅のなかでは、あらたにさまざまなことがあきらかになってきたが、とりわけわたしが驚いたのは中国の進出であり、今やアフリカン・プリントは中国のプリント産業によって席巻されつつあるということであった。

そもそもアフリカン・プリントは、イギリスやオランダをはじめとするヨーロッパの

国々が、今から200年あまり前の産業革命のなかで大量生産されるようになった木綿布に、ジャワ更紗のデザインをコピーしたプリント布の生産をはじめたことを契機としている。それらは、当初、インドネシアに送り込まれたがビジネスとしてはさほど成功したとはいえず、その後の19世紀前半には西アフリカや東アフリカにもジャワ更紗のデザインをコピーしたプリント布の輸出が始まっている。そして19世紀後半にはインドが、さらにその後には日本もアフリカ向けのプリント布の輸出をはじめており、19世紀後半から20世紀後半にかけてのアフリカでは、ヨーロッパ、インド、日本のプリント産業の熾烈な競争がつづいてきた。また、20世紀後半からは、アフリカ各国でもアフリカン・プリントの生産がはじまり、インドネシアやタイなどの東南アジアの国々からもアフリカン・プリントが輸出されるようになってきている。さらにそれらにつづいては、新興勢力として中国がアフリカン・プリントの生産に乗り出しており、今回の旅のあいだには、各地の市場で大量の中国製アフリカン・プリントの布が出回っていることを目の当たりにした。また、アフリカ各国のプリント産業は、そうした大量の中国製品の流入によって工場を閉鎖したり、中国との合併企業へと転換したりした例があいついでいる。また、2002年には上海あたりからアフリカン・プリントの生産工場が3社あったが、2005年には、上海を中心として60社を超える生産工場が出現しているとの未確認情報もある。

無視されつづける著作権

現在の国際社会は資本主義経済のシステム

を中心に展開しており、現代社会におけるさまざまな著作にとりまな個人や団体などなどの権利については、著作権を保護するための国際法がある。しかし、アフリカン・プリントの歴史は、すでに述べているように、ジャワ更紗のデザインのコピーにはじまっており、今日に至るまでアフリカン・プリントのデザインは、コピーに終始してきたといえる。したがって、そうしたなかには、国際裁判にまで至っている例もあとを絶たないが、裁判のあいだには次から次へとあらたなデザインのコピーがおこなわれているわけで、現実には著作権という法律はあつてなきがごとき状況にある。また、この点については、そもそもジャワ更紗やアフリカン・プリントのデザインに著作権が成立するの否かという難しい問題もあり、単純にコピー商品の氾濫を著作権法に違反しているとして、否定的にとらえることもできかねるといふ事態に直面している。

いずれにしても、アフリカン・プリントの使い手である一般の人々にとっては、気に入ったデザインの布が少しでも安く入手できれば、それにこしたことはないわけであり、アフリカン・プリントが売られている現場では、なかなかおもしろい状況が出現している。

たとえば、今日、ヨーロッパのプリント産業のなかにあつて、1846年創業のオランダのフリスコ（Viesco）はアフリカン・プリントのブランド商品を生産する老舗として有名である。そうしたことからフリスコのデザインは、これまでに数多くの国々でコピーされておき、今回、収集したアフリカン・プリントのうちにもそうしたコピー商品が少なからず含まれている。また、それらに貼付され

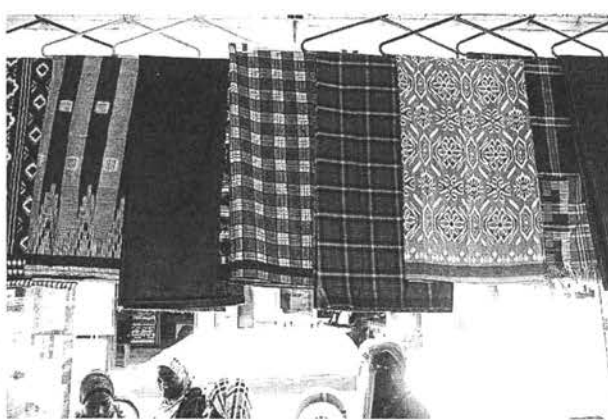


写真11 店頭に吊るされたプリントのサルン（ケニア、モンバサ：2005年）



写真10 カングの洗濯（マダガスカル：2005年）



写真13 プリントのサルンをまとった男性たち（ケニア、モンバサ：2005年）

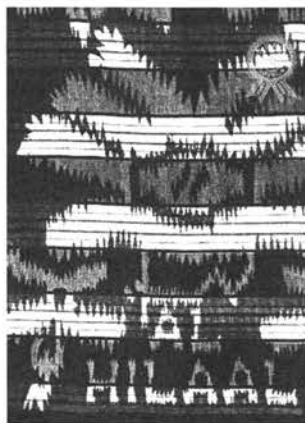


写真12 かすり模様を模したプリント・デザインのサルン（ケニア、モンバサ：2005年）

西アフリカから東アフリカにかけての熱帯アフリカで流通しているアフリカン・プリントは、かならずしも共通のものではなく、国や地域、あるいは時代によって、プリント・デザインをはじめとするさまざまな違いが認められる。そうしたなかにあつて、今日、熱帯アフリカでひろくもちいられているアフリカン・プリントは連続模様のプリント布である。それらは基本的には1着分の衣装用布として販売されており、西アフリカでは6ヤード、東アフリカでは4ヤードの長さが一般的である。ただし、東アフリカでは長さ4ヤードの連続模様のアフリカン・プリントは「キ

東アフリカのプリント布

ているラベルのうちには、フリスコのラベルとほとんど同じものが貼付されているが、よく見るとラベルの一部にはアルファベットで「HOLLAND PRINT AS VISCO」（フリスコ風のオランダ・プリント）と印刷されている。また、ナイジェリアでは国産のアフリカン・プリントとして、GCMという会社で生産されたものが知られているが、そのコピー商品のうちには、GCNやBNOという名称を使用した、きわめてまぎらわしいラベルが貼付されている。ただし、このようなまぎらわしさはラベルにかぎったことではなく、実際には、さきのフリスコ製、GCM製のものも含めて、個々のアフリカン・プリントの製造元を特定することは、とりわけ一般の使い手にとってはほとんど不可能であり、つくり手の側からすれば今も昔もつまるところ売れるが勝ちという流れのなかで、あらたなデザインやそれらのコピー・デザインによるアフリカン・プリントがくりつくりつづけられている。

テンゲ」と呼ばれ、そのほかに「カング」と呼ばれる、さらに短いサイズのパネル状のデザインによるプリント布がある。東アフリカのアフリカン・プリントのうちには、以上のようなキテンゲとカングの2種類があるという点については、前回のケニアでの調査のさいに理解していたが、今回はそれらとは別に「サルン」と呼ばれるプリント布製の衣装があるということがあきらかになった。このサルンという名称は、インドネシアのジャワ島で使用されてきた伝統的な筒型スカートの名前で、ジャワ更紗の筒型スカート状の衣装もサルンと呼ばれている（わが国では一般に「サロン」の名称で知られている）。東アフリカでサルンと呼ばれているプリント布製の衣装もまた、筒型スカートとして仕立てられたもので、プリントの布地には、格子縞、あるいはかすり模様を模したデザインが一般的である。これらのサルンは、いずれもインドネシア製で、東アフリカではもっぱらイスラームの男性が礼拝用の衣装としてもちいており、このサルンもまたアフリカン・プリントのうちに包括される。

前回、2006年1月号（No.298）の連載記事の「アフリカン・プリントは木綿の布にスクリーン・プリントによって模様をあらわした捺染布」（59頁）の記述は、「アフリカン・プリントはおもに木綿の布にスクリーン・プリント、ローラー・プリント、ブロック・プリントなどによって模様をあらわした捺染布」と修正します。

（国立民族学博物館民族文化研究部教授／

よしもと・しのぶ）